

我

我

◆ 人物

織原 弥生 (29) OL

白鳥 夏樹 (35) 洋食屋兼居酒屋「白鳥」

男店主

恩田 美月 (29) 弥生の同僚

梢 (22) 「白鳥」のバイト従業員

御膳 匠 (31) 会社経営

謎の老女

黒ずくめの男

○病院・病室（夜）

T・2072年

心電図の波形がフラットになり、『ピ
ー』という停止音が室内に響き渡る。
医師、白くて筋張った老女（老女の顔
は医師の陰に隠れて見えない。以下同
様）の腕を取り、脈拍を取る。
医師、そつと老女の腕を元に戻し、手
を合わせる。

○ラブホテル・一室（朝）

T・2022年

サイドテーブルに置いてあるスマホの
アラームが鳴り響く。
ベッドの布団の膨らみがモゾモゾと動
く。

布団の隙間から白くて細い腕が伸び、
手探りでスマホを掴むと、アラームを
止める織原弥生（29）。

弥生、寝向け眼で裸の体を布団で隠し

ながら上体を起こす。
一人だけの部屋を暫く見渡す。
ベッドの傍に脱ぎ捨てられ散乱する自
身の服と財布。
弥生、財布を拾い上げ、中身を確認す
るが、中には一銭もない。
弥生「やられた。イタタタ……」
と、こめかみを押さえる。

○ 飲食店街・通り

シャッターが下りた店舗がちらほら建
ち並ぶ。
シャッターには『閉店』や『空き店舗
』の貼り紙が散見される。

○ 同・洋食屋兼居酒屋「白鳥」・外観

『感染防止認証店』のステッカーが入
口の扉に貼ってある。

○ 同・中

テーブル席に体を突っ伏し、溜息を何
度も漏らす弥生。

白いコックコート姿の白鳥夏樹（35

）が、弥生に水を出す。

白鳥はずんぐりしており、イケメンと

は程遠い。

白鳥「どうした？ 今日なんか元気ないね」

弥生「まあ、色々あって」

白鳥「いつものでいい？」

弥生、頷く。

× × ×

白鳥「はい、お待たせ」

と、デミグラスソースたっぷりのオム

ライスを弥生の前に置く。

弥生「わあ、美味しそう」

と、弥生の顔がパツと明るくなる。

白鳥「美味しそうじゃなくて美味しいの」

弥生「はいはい」

と、オムライスを一口食べ、

弥生「うまつ。やっぱ此处のは間違いない。」

なんか嫌なことが全部吹っ飛んだ」

白鳥「それは良かった。じゃあ、これはサ―

ビス」

と、プリンを置く。

弥生「いいの？ やったー」

白鳥、美味しそうに食べる弥生を見て

顔が綻ぶ。

弥生「（疎らな客入りに）大変そうだね？」

白鳥「こんなご時世だからね。それでも以前

に比べれば大分マシになった方だよ」

弥生「そっか。また夜も飲み来る」

白鳥「有難う。助かるよ」

客の声「おあいそ」

白鳥、弥生に会釈し、レジへ駆け出す。

○×××商事・弥生の職場（朝）

出勤してくる社員たち。

恩田美月（29）、デスクに座り、何気

ない様子で左手中指のササクレを筆る。

弥生の声「お早う」

と、隣の自分の席に座る弥生。

美月「お早う」

弥生「血出てる」

と、血が滲む美月の左手中指に目をやる。

弥生「筆るの止めなって言ってるじゃん」

美月「癖っていうか、ついやっちゃうんだよね。それより昨日何で休んだの？」

弥生「それがさ、聞いてよ。やり逃げされてさ」

近くにいた数人の男性社員が弥生を振り返る。

弥生「（声を落とし）財布の中の現金に、その上身につけてたピアスに時計まで根こそぎよ」

美月「え、また？！前にもそんなことなかった？」

弥生「そうだっけ？美月がササクレ剥くのと一緒に私もイケメンとなるとつい……」

美月「そんなのと一緒ににしないでよ。ホント

呆れた……」

弥生、苦笑いを浮かべる。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」・中（夜）

弥生、テーブル席に座り、ジョッキの生ビールを飲み干す。

同じ席で弥生の飲みっぷりを見て呆れる美月。

梢の声「大将からのサービスです」

と、梢（２２）、テーブルスープを美月の前に置く。

梢「で、こっちが弥生さんの分」

と、美月のより一回り大きい器に入ったテーブルスープを弥生の前に置く。

美月「前から思ってたけど、弥生のだけ毎回量多いよね？ 大将、最真してない？」

梢「さあ、それは大将に聞いて下さい」

厨房から白鳥が此方に満面の笑みを向けている。

美月「いつもすみません」

と、頭を下げるが、白鳥は美月が視界に入っていないといった感じで弥生に視線を向ける。

梢「(ボソツと)大将って分かりやすっ」

弥生「目を細めながら白鳥を見詰め」白鳥夏

樹：：ぷっ」

と、笑い出す。

美月「(驚いて)どうした？」

弥生「だって、見かけ熊みたいなのに名前が

白鳥夏樹よ。どう見ても権平熊造よ」

と、笑いに拍車が掛かる。

美月「ちよつとあんた、失礼よ」

弥生、立ち上がり、

弥生「よし！ちよつと行つて来る」

美月「え、ちよつと」

弥生、千鳥足で厨房へと歩いていく。

カウンターを挟み楽しそうに話す弥生

と白鳥を見て、

梢「あの二人、お似合いだと思いませんか？」

美月「え？」

梢「大将、お世辞にもイケメンとは言えないけど、凄く優しいし、何より仕事熱心だし。

弥生さんの相手、大将じゃ駄目ですかね」

美月「確かに弥生にはああいう誠実な人の方がいいのかも」

と、ジョッキのビールを飲み干す。

○弥生の自宅マンション・外観

晴れ渡った青空が広がる。

○同・洗面所

ボサボサの髪に、青ざめた弥生の顔が鏡に写る。

弥生「ヤバイ、昨日飲みすぎた」

と、鏡に写る浮腫んだ自分の顔が気になるのか何度も顔を触る。

歯ブラシを手にし、残り僅かとなった歯磨き粉のチューブを力一杯絞り出す。

『プスッ』という力ない音ともに最後の一絞りが歯ブラシの上に乗る。

○ドラッグストア・中

弥生、齒磨き粉が並ぶ棚の前で品定め。

その中の一つに目が留まり、手を伸ばす。

と、そこへ男の手が伸びてくる。

男「あ、すみません」

弥生「いえ、此方こそ」

男、顔を上げた弥生の顔を見て、

男「（驚いた様子で）あっ」

弥生「？」

と、訝し気に男の顔をジッと見詰め、

弥生「（思い出したように）あ、この間のや

り逃げ男！」

他の客が一斉に弥生を振り返る。

男、慌ててその場から駆け去る。

弥生「ちよつと、待ちなさいよ！！」

男の後を追って店を駆け出る。

○大通りゝ袋小路

曇り始める空。

男、正面から歩いて来る人突き倒し、
駆け去っていく。

弥生、数メートル後方から、

弥生「誰か、その人捕まえて下さい！ ヤリ

……泥棒です！」

と、男を追って駆け去っていく。

× × ×

男、袋小路に入り込む。

弥生、追いつき、

弥生「（息を切らし）もう逃げられないわよ。

さあ、盗ったもの返して！」

と、掌を突き出す。

男「そんなもん、もうねえよ」

弥生「はあ？！ ふざけんな！」

と、男に掴みかかる。

男「何すんだ。離せよ、クソアマ！！」

と、弥生を突き倒す。

弥生、地面に倒れこんだ拍子に足首を

捻る。

弥生、顔を歪め足首を押さえる。

男「お前も充分楽しんだろ？　あの金はその見返りだ」

弥生「ハナからお金が目的だったの？」

男「当たり前じゃん。じゃなきゃ、お前みたいな腐れビッチ、誰が相手にするかよ」

弥生「（俯いたまま）……」

男「まあ、騙されたくなかったらこれから男を見る目を養うことだな。じゃあな、尻軽さん」

と、乱れた襟元を正し、その場を去る。

弥生、顔を伏せたまま体を震わせる。

地面に水滴が落ちる。

と、雷鳴が響き渡り、雨粒が激しく地

面を打ち始める。

弥生、目元を拭い、立ち上がる。

○路上

傘を差しながら、エコバッグ片手に歩

く白鳥。

雨粒が白鳥の傘を強く打つ。

白鳥、雨の中、傘も差さず足を引きずる弥生を見かける。

× × ×

白鳥の声「弥生ちゃん！」

弥生、振り返ると此方に駆け寄る白鳥が見える。

白鳥の走り方はどこか不格好だ。

白鳥「（弥生に追いつき息を整えると）こんな雨の中、傘も差さないでどうしたの？」

弥生「別に」

と、再び歩き出す。

白鳥「（弥生を追いかけながら）別にとって、風邪ひくぞ」

と、弥生に傘をかけてやる。

弥生、立ち止まり、

弥生「何？ やり逃げされた惨めな女に優しく

くしていい男気取り？ ふっ、笑わせない

だよ」

白鳥「え？ 俺はただ……」

弥生「うるさいな、ほっといてよ！！」

と、白鳥を突き倒す。

白鳥「（地面に尻もちを付き）弥生ちゃん？」

と、弥生が歩き去る後姿を呆然と見詰める。

雨の中、弧を描いて転がる白鳥の傘。

○高架下（夜）

満月が夜空を照らす。

弥生、足を引ずりトボトボと歩く。

老女の声「ちよつとそこのお嬢ちゃん」

弥生、振り返ると『顔相占い』と書か

れた看板の隣で老女が座っている。

老女「こっちへ来て顔を良く見せておくれ」

弥生、訝し気に老女を見る。

老女「さあ、ほら」

弥生、恐る恐る老女の前に来る。

老女、拡大鏡片手に弥生の顔を覗き

込む。

老女「こりゃ、大分重症だね」

弥生「重症？　そんなに悪い相してますか、

私？」

老女「それはもう」

弥生「悪いってどんな風に？！」

老女「男難の相だね」

弥生「ダンナン？」

老女「男運のない顔の相さ。ダメ男しか寄つ

てこないだろ？」

弥生「（俯き）……」

老女「相手に問題があるのか、それとも自身

に問題があるのか……どっちにしろこの

ままだと一生幸せにならないね」

弥生「そんなの絶対嫌！　どうにかありません

んか？」

老女「仕方ないね。特別だよ」

と、小汚いボストンバッグから白い縄

を取り出し、弥生に手渡す。

老女「いい男が目の前に現れたら、この縄で

自分の足首と相手の足首を結ぶんだ。縄が

白から赤に変わればそいつがあんたの運命

の男だ」

弥生「（老女に疑いの目を向け）騙そうとして
ません？　そもそも何で縄？」

老女「中国の古典に『定婚店』という話があ
ってね。運命の相手とは互いの足首が赤い
縄で結ばれているという逸話さ」

弥生「いやいや、そんな迷信みたいな話やつ
ぱり……それに高く売りつけようってん
じゃ」

老女「（首を横に振り）今回は特別にタダでい
いよ」

弥生、縄に手を伸ばしかけ、手が止ま
る。

老女「幸せになりたいんだろ？　だったら迷
信にすがってみてもいいんじゃないかい」

と、弥生の顔をジッと見詰め、頷く。

弥生、白い縄を受け取る。

×　　　×　　　×

一人になった老女。

サングラスをかけた黒ずくめの男が老
婆の前に現れる。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」・外観

『仕込み中』の札が扉に下がっている。

○同・中

白鳥、カウンターに座り、帳簿を広げている。

計算機を叩き、表示された数字が『一』を示す。

白鳥、溜息を漏らす。

扉が開く音がし、白鳥、帳簿を閉じる。

白鳥「すみません、まだ仕込み中で」

と、振り返ると弥生が立っている。

弥生「昨日はその……ごめんなさい！」

と、頭を下げる。

弥生「悪いことが続いて、それでついイライ

ラ……」

白鳥「気にしてないよ。それよりいつもので

いい？」

弥生「えっ？」

白鳥「ちよっと待ってて。直ぐ作るから」

弥生「うん！」

と、カウンター席に座る。

○×××商事・屋上

煙草を吹かす数人の男性社員。

弥生と美月、並んでベンチに腰掛け、

美月「（白い縄を手に）怪しい老女から縄をも

らったね。で、その老女の話ではこの縄で

互いの足首を結んで赤く変わったらその相

手が運命の人ってわけ？」

弥生「そう、如何にも怪しいでしょ？ この

縄返した方がいいよね」

美月「（暫く縄を見詰め）面白いかも」

と、胸ポケットに差していたボールペ

ンで縄に『良縁成就』と書く。

弥生「ちよつと！」

美月「真剣に相手を探すいい機会じゃない。

ダメもとでやってみたら？ それに本当に

運命の人に出会えるかもしれないじゃん」

と、縄を弥生に返す。

弥生「それ本気で言ってる？ 探すって言うてもどうやって」

美月「ちようどいいアプリがある」

と、スマホの画面を弥生に見せる。

『はっぴいマッチ』というマツチング

アプリのサイトが表示されている。

美月「アプリだと条件に合った人が手軽に見つかるし。私も今の彼とはこのアプリで知り合ったんだから」

と、右手薬指の指輪を弥生に見せる。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」・外観（夜）

店先に吊るされた提灯に灯りが灯る。

○同・中（夜）

カウンターに座る弥生と美月。

白鳥、厨房から気が気でない様子で弥生をチラホラ見る。

美月「スマホを見ながら」イケメンね」

白鳥のフライパンを振る手が止まる。

スマホにはスーツ姿の御膳 匠（31

）のプロフ写真が写っている。

御膳は爽やかイケメンだ。

弥生「でしょ？！」

美月「て、大丈夫なの？」

弥生「（スマホを美月から取り上げ）今度は大

丈夫よ。それに顔だけじゃなくてベンチャ

ー企業の社長よ」

美月「余計心配になってきた」

弥生「やめてよ。今度会うんだから」

白鳥、悔しそうに『ガチャガチャ』と

音を立てフライパンを振る。

弥生、訝し気に白鳥を見る。

ジョッキを下げに来た梢に、

弥生「（白鳥に目をやり）どうしたの、あれ？」

梢「（苦笑いを浮かべ）さあ」

美月「そう言えば、梢ちゃん。就職決まった

んだって？」

梢「はい、おかげ様で」

弥生「良かったじゃん。おめでとう。就活頑

張ってたもんね」

梢「でも、此处辞めるのは何だか寂しいです
と、厨房の白鳥の背中を見る。

○ラブホテル・一室

弥生と御膳、ベッドに座り見詰め合う。

御膳、弥生の肩を掴み、ベッドに押し
倒すと、口づけしようとする。

弥生「ちょ、ちよつと待った！」

弥生、ハンドバッグを手に取り、中か
ら白い縄を取り出す。

御膳「（白い縄を見て驚くが）いいね。そうい
うの嫌いじゃないよ」

× × ×

弥生と御膳、横並びで互いに真正面を
向きベッドに腰掛けている。

互いの足首は白い縄で繋がれている。
御膳「（痺れを切らしたように）もういい？」

弥生、白いままの縄に目を落とし、肩
を落とす。

御膳「どうしたの？」

弥生「あ、いや…… やっぱこんな縄インチキだわ」

と、縄を足首から外し、投げ捨てる。

御膳「（弥生を見詰め）じゃあ、さっきの続き

弥生、頷き、目を閉じる。

御膳、弥生をベッドに押し倒す。

〇×××商事・弥生の職場（朝）

弥生、肩を落とし出社してくる。

弥生の落ち込み様に周りの社員たちが

驚く。

美月、デスクで退屈そうに指先のササ

クレを剥く。

弥生、無言で自分の席に腰を下ろす。

弥生「またやり逃げ去れた……」

と、デスクの上に顔を伏せ泣き崩れる。

美月「え、あのイケメン社長？」

弥生「（顔を埋めたまま頷き）一回やったら

その後全然連絡つかなくなった」

美月「縄は？　　試さなかったの？」

弥生「試したよ」

美月「じゃあ、何で？　ちゃんと赤くなつた

の？」

弥生、首を横に振る。

美月「なのに体許したわけ？」

弥生「（顔を上げ）だって、近くで見るとマジ

でいい男なんだもん。あの顔面で言い寄ら

れたら断れないって。それにあんな縄当て

になるかも分かんないし」

美月「呆れた：：　もう知らない！」

と、立ち上がり席を離れていく。

弥生「えっ、美月：：」

と、美月が部屋を出て行くのを立ち尽くして見送る。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」く同・貯蔵庫

スプーンが皿にぶつかる音だけが店内に響く。

弥生、カウンターに座りオムライスを

黙々と食べている。

白鳥、皿洗いをしながらチラチラ弥生に目をやる。

弥生の目から涙が零れ、嗚咽しだす。

白鳥「皿洗いの手を止め」弥生ちゃん？」

弥生「ごめん。大将のオムライス食べたなら何
だかホツとして……」

白鳥「何だよ、それ」

弥生「つくづく馬鹿な女よ、私」

白鳥「急にどうしたの？」

弥生「男を見る目が無いっていうか。傷つく
のが分かってるのにそれでもどうしようも
なくて。美月にも見放されて、ホント私つ
て馬鹿よ」

と、顔を臥せ、涙を流す。

白鳥「弥生ちゃん……」

と、生唾を飲み込むと、弥生の右手を
握り、

白鳥「俺じゃ駄目かな？俺は弥生ちゃんを
傷つけるようなことは絶対にしない」

弥生「（顔を上げ）大将……」

と、驚きの表情を浮かべ、手を引っ込める。

白鳥「あ、いや……ごめん」

弥生「（気まずそうに）……」

白鳥「そうだ、食材取ってくるわ」

と、貯蔵庫へ足早に向かう。

弥生、自分の右手に目を落とす。

と、貯蔵庫から大きな物音がする。

× × ×

貯蔵庫の中で崩れた木箱の下敷きにな

る白鳥。

弥生、駆け付け、

弥生「大将！！」

と、白鳥の体を覆う木箱の山を取り除いていく。

白鳥「（体を起こし）……」

弥生「大丈夫？」

と、貯蔵庫の扉がゆっくりと閉まり、鍵のかかる音がする。

弥生「え、これヤバくない？」

と、ドアノブを回すが扉は開かない。

弥生「ちよつと、どうしよ？！」

と、扉を何度も叩く。

白鳥「どいて」

と、扉に体当たりするが開かない。

× × ×

白鳥、何度も扉に体当たりを繰り返す。

弥生、膝を抱いて床に座り、小刻みに

震えている。

弥生「此処っていつもこんなに寒いのか？」

と、吐く息が白くなる。

白鳥「いや、そんなことないんだけどな」

と、コックコートを脱ぐと弥生にかけ

てやる。

白鳥「(Tシャツ姿になり)兎に角、此処から

出ない」と

と、袖を肩まで捲り上げると再び扉に

体当たりする。

その度に上腕二頭筋が隆起する。

弥生、汗をかきながら真剣な表情で何
度も体当たりする白鳥に目を奪われる。
ふと、床に落ちている白い縄に気付き、
拾い上げる弥生。

弥生「この縄……」

と、縄にはボールペンで書かれた『良
縁成就』という文字。

弥生「（驚き）何でこんな所に……」

白鳥は必死に体当たりを続ける。

弥生「（頷き）大将、ちよつと」

× × ×

弥生、隣に座る白鳥の足首と自分の足
首を白い縄で結ぶ。

白鳥「一体何のまね？」

弥生「いいから、黙ってて」

と、生唾を飲み込む。

白い縄が見る見る赤色に変わる。

白鳥「（一瞬驚き）何これ？ トリック？」

弥生「（首を横に振り）違う……」

鍵が開く音がし、弥生と白鳥、訝し気

に互いを見る。

○同・店先

弥生、縄を手に店から出てくる。

トボトボと店から遠ざかってゆく弥生

の後姿を物陰から窺う老女。

黒ずくめの男が老女の背後に現れる。

老女「後は素直になれるかだ」

と、歩き去っていく弥生をジッと見詰める。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」・厨房（夜）

梢、皿を下げに来る。

白鳥は黙々と皿を洗っている。

梢「最近、弥生さん全然店に来ませんけど、

大将何か知りませんか？」

白鳥「……」

と、皿洗いを続ける。

梢「何だかこのままじゃ私、辞めるに辞められないな」

と、厨房を後にする。

○高架下

弥生、老女が店を出していた場所を訪れるが、老女の姿は既にない。

弥生、肩を落とし、歩き出す。

老女の声「この前のお嬢ちゃんじゃないか」

弥生が振り返ると、老女がレジ袋片手に立っている

○公園

弥生と老女、ブランコに腰掛ける。

老女「私も今まで数多くの男と浮名を流して

きたけどね」

弥生「（笑いながら）それホント？」

老女「失礼な。こう見えてもこの年まで男を

欠かしたことはないんだから。でも、体は

許せても心まではね」

弥生「……」

老女「その男という時が、自分を飾らずにい

られて、一番安心するんだろ？」

弥生「まあ……」

老女「思い出したよ。私にも生涯でそういう男が一人いた。でも、その時の私は自分の気持ちに素直になれなかった。結果、本当の愛を知ることなくこの年まで来ちまった」

弥生「ほんとうの……愛」

老女「もし過去に戻れるなら、その時の自分に『もっと素直になれ』って背中を押してやるだけだね」

弥生、頷くと立ち上がり、駆け出す。

○洋食屋兼居酒屋「白鳥」・店先

弥生、『店じまい』の貼り紙の前で立ち尽くす。

隣の電機店の店主が箒片手に現れ、店主「立ち尽くす弥生に」バイトの子が就職決まるまではって頑張ってたけどね。流石にこのご時世じゃ仕方ないよ」

弥生「いつですか？」

店主「ついさっき挨拶に来てたよ。夕方の飛行機で田舎に帰るとか何とか」

弥生、駆け出す。

○空港・ロビー（タ）

白鳥、スーツケースを引きながら進む。

弥生の声「白鳥夏樹、行っちゃダメ！！」

と、振り返った白鳥に抱きつく弥生。

○洋食屋「やよい」・店先

頭にバンダナを巻きエプロン姿の弥生

が店から出て来て、『仕込み中』の札

を『営業中』に裏返す。

老女の声「幸せにね」

弥生「えっ？」

と、驚いて周囲を見渡すが、人の姿はない。

店の中から、

白鳥の声「弥生、こっち来てちよっと手伝ってくれないか」

弥生「はい」

と、店に戻っていく。

○公園（夕）

ブランコを漕ぐ老女に黒ずくめの男が近づき、隣に腰を下ろす。

黒ずくめの男「もう気が済んだか？」

老女「ああ」

黒ずくめの男「織原弥生・享年79・生涯未

婚・死因 虚血性心不全。しかし、あんた

ぐらいだぞ。あの世に行く前に思い残した

事があるからって閻魔様に散々駄々こねて

過去の自分に会うなんて」

老女「これだと思い残すことはもうない。さあ、

あの世でもなんでも連れてっておくれ！」

と、勢いよくブランコを漕ぐ。

× × ×

誰もいない公園にブランコだけが揺れている。
（了）